

《そう合問題6》

いろいろなしゅるいの文章問題をといてみよう。問題を
とくときは、本文をよく読み、内ようをしつかり理かいす
ることが大切です。

【例題】

次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、きのう買ってもらったグローブを手にはめて、お父さんと公園でキャッチボールをしています。

お父さんが、ミナトに聞きました。

「このグローブは、子ども用だから小さくて軽いけど、きのうの大人用のは、重くてかたかっただろう。」

ミナトはきのう、スポーツ用品店で、大人用のグローブもはめさせてもらったのです。

「うん。手を動かすのかもしれない。それに、グローブって、何万円もするものもあるんだね。びっくりした。」

「そうだね。お父さんもはじめて知ったよ。何万円っていいば、ミナトは、学校で一万までの数を習ったの。」

「習ったよ。」

「それじゃあ、一万は千の十倍っていうことも分かるのかな。」

「分かるよ。百の十倍が千で、千の十倍が一万でしょう。それも知ってるよ。ゼロが一こずつふえる。」

「そうだね。じゃあ、一万を数字で書くと、ゼロは何こつくでしょう。」

「えっと、一、十、百、千、万だから、四こ。」

指をおって数えながら、ミナトは答えました。

「さすが。じゃあ、一の後にはゼロが五こつく数は何でしょう。」「十万。」

「すごいね。ミナトは、数をどこまで知ってるの。」

「一億までやったよ。一億はゼロが、ええつと……。一、十、百、千、万、十、百、千、万、一億……。九こつくのかな。」

「ざんねん。さいしよに数えた一は、ゼロがつかないからおった指が九本なら、ゼロの数は、それより一こ少ないハこ。おった指のいちばん左が一で、他の指がゼロって考えてもいいね。」

「そうか。そういうことか。」

ミナトは、お父さんにいいことを教えてもらったと、ちよつとうれしくなりました。

(1) ミナトは、どこで、大人用のグローブをはめてみましたか。

(2) 一万は、千の何倍の数ですか。

(3) 一億を数字で書くと、一の後に、ゼロが何こつきますか。

(4) お父さんは、ゼロが何こつくかを数えるときに、どのようにすればよいと教えてくれましたか。() にはあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

さいしよに数えた一は、(ア) から、おった指の数より、一こ(イ) 数になる。

また、おった指のいちばん(ウ) が一で、他の指が(エ) と考えてもよい。

【答え】

(1) スポーツ用品店

(2) 十倍

(3) ハコ

(4) ア ゼロがつかない

ウ 左 エ ゼロ

イ 少ない

【かいせつ】

(1) 本文に、「ミナトはきのう、スポーツ用品店で、大人用のグローブをはめさせてもらったのです。」とある。

(2) お父さんの言葉に、「それじゃあ、一万は千の十倍っていうことも分かるのかな。」とある。

(3) ミナトは「九」と答えたが、それに対してお父さんは、「ざんねん。ゝおった指が九本なら、ゼロの数は、それより一こ少ないハコ。」と言っている。

(4) お父さんが教えた、ゼロの数の数え方は、次の二つである。

・さいしよに数えた一は、ゼロがつかないから、おった指より、一こ少ない数になる。

・おった指のいちばん左が一で、他の指がゼロと考える。

次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、お父さんと、公園でキャッチボールをしていました。のどがかわいたので、水を飲んでひと休み。ベンチにすわって、数の話をしています。

「数って、一を十倍、また十倍ってしていくと、一、十、百って、数のけたがふえるよね。一じゃない数でも、十倍すると、ゼロが一つふえて、けたがふえるんだ。次は、反対から考えてみようか。百をどうするとゼロが一つ減って十になるのか、知っているかな。」

と、お父さんは言いました。

「十倍の反対でしょう。十分の一。」

「よく分かっているねえ。そう、百を十分の一にすると十になる。一万からつづけて十分の一にしていくと、どうなるか言ってみて。」

「ええっと、一、十、百、千、万の反対だから、万、千、百、十、一、わあ、一から言うときには、ぱつと言えるけど、反対からだとむずかしいね。」

「そうだね。じゃあ、一を十分の一にしたら、どんな数になるでしょう。」

「ええっと……。一は、いちばん小さい数だから、もう十分の一にはできないよ。」

「そんな気もするね。でも、たとえば、一メートルのひもを、

十等分することはできるよね。そうすると、一を十等分した長さを表す数がほしくなるよね。」
お父さんの言葉を聞いて、ミナトは、一の十等分について考え始めました。

(1) 数を、十倍、さらに十倍とすると、何がふえますか。
本文中から四字でぬき出そう。

(2) 一万からつづけて十分の一にしていくと、どうなりますか。()にあてはまる数を、本文中からぬき出そう。

万 ↓ (ア) ↓ (イ) ↓ (ウ) ↓ (エ) ↓

ア
イ
ウ
エ

(3) ―線部「一を十分の一にしたら、どんな数になるでしょう」という問いに対して、ミナトとお父さんは、それぞれどのように考えましたか。空らんにあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

〈ミナト〉

は、いちばん小さい数だから、

と考えた。

〈お父さん〉

一メートルのひもを、

ことはできるから、一を

した長さを

と考えた。

する

次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、お父さんと公園に来ました。ベンチにすわって、二人で数の話をしていました。

「一メートルの十分の一を、センチメートルを使わず、メートルで言いたいんだ。そこで、一を十等分した数を、だれかが考えたわけだ。」

と、お父さんは言いました。

「へえ。それでどうなったの。」

「一を十倍したときには、一の右にゼロをつけたよね。そこで、十分の一にしたときには、左にゼロをつけるんだ。それから、ゼロだけじゃなくて小さな点も。ほら、シャーペンシルのしんのケースに、0.5mm(ミリメートル)って書いてあるの、知らないかなあ。」

「あ、見たことある。」

「たとえば、0.1と書いて、『れいてんいち』って読む。これを小数といって、0.5mmというのは、しんの太さのことなんだけど、0.1ミリメートルの□こ分っていうことなんだ。」

「そうかあ。でも、ちょっと待って。一ミリメートルって、ものさしのいちばん小さい目もりでしょう。あれの十分の一が、0.1ミリメートルっていうことだよ。シャーペンシルのしんは、その□こ分か。細いの、よ

くおれないね。」

そう言われてお父さんも、

「そうだね。細いのにじょうぶで、すらすら書けるし、とてもべんりだね。」

と、感心しました。

(1) ミナトは、どこで、だれと、何をしていますか。空らんにあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

	で、				と公園の	

をしている。

(2) 一を十分の一にした数の表し方について、次の問いに答えなさい。

A ゼロは一のどちらに書きますか。

--

B ゼロの他に、何をつけますか。本文中から四字でぬき出そう。

(3) シャープペンシルのしんのケースに書いてある数字は、何を表していますか。

しんの

--

(4) ミナトは、一ミリメートルを、どのような長さと考えましたか。本文中から十五字でぬき出そう。

(5) 本文中の

 には、同じ数が入ります。その数を漢数字で書きなさい。

--

次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、お父さんと、公園でキャッチボールをしていました。のどがかわいたので、水を飲んでひと休み。ベンチにすわって、数の話をしています。

「数って、一を十倍、また十倍ってしていくと、一、十、百って、数のけたがふえるよね。一じゃない数でも、十倍すると、ゼロが一つふえて、けたがふえるんだ。次は、反対から考えてみようか。百をどうするとゼロが一つ減って十になるのか、知っているかな。」

と、お父さんは言いました。

「十倍の反対でしょう。十分の一。」

「よく分かっているねえ。そう、百を十分の一にすると十になる。一万からつけて十分の一にしていくと、どうなるか言ってみて。」

「ええっと、一、十、百、千、万の反対だから、万、千、百、十、一。わあ、一から言うときには、ぱつと言えるけど、反対からだとむずかしいね。」

「そうだね。じゃあ、一を十分の一にしたら、どんな数になるでしょう。」

「ええっと……。一は、いちばん小さい数だから、もう十分の一にはできないよ。」

「そんな気もするね。でも、たとえば、一メートルのひもを、

十等分することはできるよね。そうすると、一を十等分した長さを表す数がはしくなるよね。」
お父さんの言葉を聞いて、ミナトは、一の十等分について考え始めました。

(1) ミナトはお父さんと、どこで、何をしていますか。

() にあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

(ア) (イ) のベンチにすわって、(イ) をしている。

①	ア

(2) 十倍の反対は、何ですか。



(3) 一万からつづけて十分の一にしていくと、どうなりま
すか。()にあてはまる数を、本文中からぬき出そう。

万 ↓ (ア)) ↓ (イ)) ↓ (ウ)) ↓ 一

ウ	イ	ア

(4) ー線部「一を十分の一にしたら、どんな数になるで
しょう」という問いに対して、ミナトはどのように考え
ましたか。空らんにあてはまる言葉を、本文中からぬき
出そう。

	一は、	
	数だから、もう	

と考えた。

次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、お父さんと公園に来ました。ベンチにすわって、二人で数の話をしていました。

「一メートルの十分の一を、センチメートルを使わず、メートルで言いたいんだ。そこで、一を十等分した数を、だれかが考えたわけだ。」

と、お父さんは言いました。

「へえ。それでどうなったの。」

「一を十倍したときには、一の右にゼロをつけたよね。そこで、十分の一にしたときには、左にゼロをつけるんだ。それから、ゼロだけじゃなくて小さな点も。ほら、シャーペンシルのしんのケースに、0.5mm(ミリメートル)って書いてあるの、知らないかなあ。」

「あ、見たことある。」

「たとえば、0.1と書いて、『れいてんいち』って読む。これを小数といって、0.5mmというのは、しんの太さのことなんだけど、0.1ミリメートルの 公分っていうことなんだ。」

「そうかあ。でも、ちょっと待って。一ミリメートルって、ものさしのいちばん小さい目もりでしょう。あれの十分の一が、0.1ミリメートルっていうことだよな。シャーペンシルのしんは、その 公分か。細いの、よ

くおれないね。」

そう言われてお父さんも、

「そうだね。細いのにじょうぶで、すらすら書けるし、とてもべんりだね。」

と、感心しました。

(1) ミナトはお父さんと、どこで、何をしていますか。

() にあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

公園の(1)にすわって、二人で(2)をしている。

②	①

(2) 一を十倍にした数を数字で書くとき、ゼロは一のどちらにつけますか。

11

(5) —線部「細いのに、よくおれないね」とミナトに言われて、お父さんは、どう思いましたか。空らんにあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

[illegible]



次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、きのう買ってもらったグローブを手にはめて、公園でお父さんとキャッチボールをしながら、数の話でもり上がっています。

「そういえば、ストップウォッチで時間を計るときも、小数を使うね。」

と、ミナトが言うと、お父さんが、

「ストップウォッチって、デジタルだよね。」

と言いました。

「うん、そう。スタートのボタンを押して時間を計り始めて、もう一度ボタンをおすと、5・26みたいに出る。これも小数なんですよ。」

「そのとおり。5・26の5は、5秒のことだよ。2は、0・2秒のこと。その次の6は、0・1秒よりも短い時間で、0・06秒のことなんだ。」

「それ、何。」

「1の十分の一が0・1だよ。そのまた十分の一が0・01で、0・01が六こで0・06だね。」

「そうか。五十メートル走のタイムを計ったとき、ぼくは九秒七三だった。これは、九・七三秒っていうことだよ。」
「九・七三っていう数だと、九は一の位の数、じゃあ七や三は、何の位の数なのかってなるよね。」

「たしかに。」

「この『・』を小数点といって、小数点の次の位は、『小数第一位』っていうんだよ。」

「へえ、それじゃあその次は、『小数第二位』ってこと。」

「正かい。九・七三秒の三は、小数第何位か分かるかな。」

「小数点の次のその次の位だから、小数第二位だよ。」

「そうそう。学校でもうすぐ勉強すると思うから、そのとき、しっかり教わってね。」

新しいグローブでキャッチボールをして、小数の勉強をして、今日は何だか、いそがしい一日になりました。

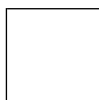
(1) 0・06秒とは、どんな時間ですか。次のア～エからえらぼう。

ア 0・1秒よりも長い時間。

イ 0・1秒の十分の一の時間。

ウ 0・01秒の六倍の時間。

エ 0・1秒の六分の時間。





(2) ミナトの五十メートル走のタイムについて、次の問いに答えなさい。

A 小数点を使わずに、漢字四字で書きなさい。

B タイムの「三」は、小数第何位の数ですか。

小数第
位

(3) ミナトが今日したことを二つ、本文中から、七字と五字でぬき出そう。



次の文章を読んで、あとの問いに答えよう。なお、句読点や記号は一字として数えます。

ミナトは、きのう買ってもらったグローブを手にはめて、公園でお父さんとキャッチボールをしながら、数の話でもり上がっています。

「そういえば、ストップウォッチで時間を計るときも、小数を使うね。」

と、ミナトが言うと、お父さんが、

「ストップウォッチって、デジタルだよね。」

と言いました。

「うん、そう。スタートのボタンをおして時間を計り始めて、もう一度ボタンをおすと、5・26みたいに出来る。これも小数なんですよ。」

「そのとおり。5・26の5は、5秒のことだよ。2は、0・2秒のこと。その次の6は、0・1秒よりも短い時間で、0・06秒のことなんだ。」

「それ、何。」

「1の十分の一が0・1だよ。そのまた十分の一が0・01で、0・01が六こで0・06だね。」

「そうか。五十メートル走のタイムを計ったとき、ぼくは九秒七三だった。これは、九・七三秒ってことだよ。」

「九・七三っていう数だと、九は一の位の数、じゃあ七や三は、何の位の数なのかってなるよね。」

「たしかに。」

「この『・』を小数点といって、小数点の次の位は、『小数第一位』っていうんだよ。」

「へえ、それじゃあその次は、『小数第二位』ってこと。」

「正かい。九・七三秒の三は、小数第何位か分かるかな。」

「小数点の次のその次の位だから、小数第二位だよ。」

「そうそう。学校でもうすぐ勉強すると思うから、そのときに、しっかり教わってね。」

新しいグローブでキャッチボールをして、小数の勉強をして、今日は何だか、いそがしい一日になりました。

(1) ミナトはお父さんと、何を使って時間を計る話をして
いますか。



(2) (1)で時間を計るとき、どのようにして計りますか。
()にあてはまる言葉を、本文中からぬき出そう。

(ア) (イ) ボタン
をおす。

(3) ミナトの五十メートル走のタイムで、一の位の数
は、何ですか。漢数字で答えなさい。

--

①

ア

(4) ミナトが今日したことを二つ、本文中から、七字と五
字でぬき出そう。
